

第 65 回 広島大学教育学部国語教育学会 プログラム

日時 令和 6 年 8 月 11 日 (日)・12 日 (月)
11 日… (受付開始 10:00) 10:30～17:00
12 日… (受付開始 9:30) 10:00～12:30

会場 広島大学教育学部 L205 教室

参加費 1,000 円 (「学生会員」は無料)
※参加費および懇親会費は、事前にお振り込みください。

第 1 日 8 月 11 日 (日)

開会行事 10:30～10:40

研究発表 (午前) 10:40～12:30

[10:40-11:10]

1. グレゴリー・ケズナジャット『鴨川ランナー』のエキゾチシズム／オリエンタリズム

広島大学大学院・院生 藤井日羽

[11:15-11:45]

2. 話し合いを位置づけた読みの授業の実際―「風切るつばさ」(小6)の場合―

広島大学大学院・院生/東広島市立入野小学校 酒井千春

[11:50-12:20]

3. 出口航平 (高知学芸中学高等学校)「高校生の読書の幅を広げる試み
―「新書レポート」「相互評価」を用いて―

高知学芸中学高等学校 出口航平

休憩 12:20～13:40

総会 13:40～14:20

研究発表 (午後) 14:30～17:00

[14:30-15:00]

4. 高等学校における困難のある学習者に焦点を当てた評論の読みの学習指導 (仮)

島根県教育センター 登城千加

[15:05-15:35]

5. 高校 2 年論理国語 単元「自分はどうか作られるのか」の試み

～複数テキスト・小説『山月記』との読み合わせを取り入れて～(仮)

広島城北高等学校 黒瀬直美

休憩 15:35～15:50

[15:50-16:20]

6. 論理国語における漢文教材の活用について―新科目における可能性を探る― (仮)

尾道市立大学 山田和大

[16:25-16:55]

7. 瀬戸内海域諸方言における行為指示表現の対照研究

四国大学 久保博雅

懇親会 18:00～20:00

会場 cafe bar THE EARTH (東広島市西条下見 6-8-19) 参加費 4,000 円

第2日 8月12日(土)

研究協議 10:00~12:30

中学校・高等学校「読むこと」の新教材と授業づくり

【司会】

広島大学 山元 隆春

【報告・提案】

京都教育大学附属桃山中学校 中山 莉麻

広島県立広島国泰寺高等学校 綱川 和明

兵庫教育大学附属中学校 水田 遼介

【協議会テーマ】中学校・高等学校「読むこと」の新教材と授業づくり

中学校国語科では令和3年度から、高等学校国語科では必修科目「現代の国語」「言語文化」が令和4年から、選択科目「論理国語」「国語表現」「文学国語」「古典探究」が令和5年度から、新しい学習指導要領に準拠した国語科の教科用図書（以下「国語教科書」）の使用が始まりました。令和4年の本学会研究協議会では新しい学習指導要領による「あたらしい授業」をどのように進めるかというテーマを取り上げ、令和5年度の研究協議会では高等学校の「現代の国語」「言語文化」の学習指導に関する提案と議論がなされました。国語教科書に収められた教材をどのように研究して学習指導を行っていくのかということは、日々の国語科教育を進めていく上での基本であると言えます。とくに国語科においては、さまざまな言語活動を展開していく上で、必ずと言っていいほど、国語教科書の教材を扱うことになります。「コンピテンス」ないし「資質・能力」ベースの教育に取り組むことが求められている現在ではありますが、国語という教科の学習指導が国語教科書という書籍を素材として営まれていることに変わりはありません。

「読むこと」の新教材を使ってどのような授業を営むのか。この研究協議会ではそのことを考えたいと思います。新教材について考えることが、「読むこと」のこれからの学習指導のなかで何が必要とされるのかということを考えることでもありますし、旧課程でも使われていた教材との関連性について考えることでもあります。

たとえば、令和5年度から使用されているK社の「論理国語」教科書の冒頭に村田沙耶香さんの「気持ちよさという罪」という文章がありますが、村田さんの言う「罪」とは何かを考えるなら読者はこの文章を他人事にはできません。「私は子どもの頃、『個性』という言葉の薄気味悪さに傷ついていた。それなのに、『多様性』という言葉の気持ちよさに負けて、自分と同じ苦しみを抱える人を傷つけた」という村田さんの言葉は、どのように読者の言葉になるのか。教材の内容について考えることは大切なことですが、そのことと教材が読者のマインド（頭）にどのようなさざ波を起こし、疑問を引き出し、それを解決する過程で読者のハート（心）にどのような成果をもたらすのかということを考えていくこともそれと同じくらい大切なことです。「新」教材は果たしてそのようなことを起こしてくれるのでしょうか。あるいはマインドには働きかけるが、ハートには何の痕跡も残さないものなのでしょうか。それならば、これまでに使われていた教材だけで事足りるということにもなります。私たちは国語教科書教材を使って、これまで何をできて、これから何をしていく必要があるのか。「新」教材に光を当てながらそのことを考えることは、「国語科とは何をする教科なのか」ということを改めて考える糸口になると思います。

これは教科名「国語」に変化こそないものの、その仕組みが「資質・能力」を軸として従来とは変わった中学校にしても、必修科目・選択科目とも一新した高等学校においても、重要な課題です。国語科とは何をする教科なのか、国語科はどのような言葉の使い手を育てることを目指すのか、教育において国語科はどのような意味で必要なのか。少々大げさな問いかもしれませんが、「新」教材を加えて、国語教科書と国語科の学習指導が大きな転換点を迎えていると思われるこの時期にこうした問題を会員の皆様と一緒に考えましょう。